

まえがき

「国の給付金で、億を稼ぐ。」

皆さんはこんなうたい文句の広告がSNSで表示されたら、どう思うだろうか。

特殊詐欺か新手法の怪しいビジネスと思う人もいるのではないだろうか。

だが、実際にはこれは障害者福祉事業のフランチイズ加盟を呼びかける広告だ。

「福祉でフランチイズ……って、どういうこと？」「福祉で億単位のお金が稼げるの？」
そんなふうに疑問に感じるだろう。多くの人は「障害者福祉といったら、『福祉』の心
を持った篤志家みたいな人がやってるんじゃないの？」「福祉って、お金儲け^{もうけ}のためにやるものじゃないでしょ」と思うのではないか。

ところが今や、福祉の世界はかつてとは様変わりしているのだ。知的障害のある子ども
の親として、そして記者として私が福祉の世界に触れるようになって約20年。私自身、
「……まで来てしまったのか」「こういう人たちが入ってきてしまったのか」と、驚きを禁

じ得ない。

もちろん、まっとうに運営している事業者や、良質な事業者もたくさんいる。一方で、「モラルの底が抜けてしまっている」と感じる事業者が一部とはいえ、どんどん広がっていると云わざるを得ない。

過去にも悪徳事業者や、不正に手を染める事業者はいた。だが、かつては事業者もそれが「悪」や「不正」だと分かっていた、あくまでひっそりと、こっそり行っていた。それが今は様相が異なっているのだ。

東証プライム上場企業や、そのグループ会社が「SDGs（持続可能な開発目標）」「障害者のインクルージョン」「社会貢献」などどうたい、法律や制度のすき間を狙って、利用者よりも利益優先の運営をしている。どの事業者も「コンプライアンス（法令順守）」を強調するが、その意味は「法律に違反しているわけではない」と言っているように聞こえてしまう。いわば制度を「ハック」している状態だ。

不正が発覚した事業者にしても、見栄えのいいホームページを作り、そこでは美辞麗句が躍っている。「ひっそり」「こっそり」ではなく、堂々とかつ巧妙に行われているのが今の福祉ビジネスの特徴だ。

そして、進行するその事態に制度や行政があまりにも無力なことにも驚いてしまう。取材で出会った障害者や家族の多くは「こんなひどいことが行われているのだから、当然、行政が取り締まってくれるのだろう」と思っただけで相談や通報をしている。ところが、何ともならない。

「うちでは指導できないんです」

「証拠はありますか？」

「民・民の問題なので……」

そんなふうに言われて、仕方なく報道機関に情報提供したり、泣き寝入りしたりしている人たちがたくさんいる。

確かに、行政側にもやむを得ない事情がある。一つの部署で何でもできるわけではないし、組織であれば担当が分かれているのは当然だ。あまり知られていないことだが、日本の人口あたりの公務員数は先進国で最低レベル。一方、高齢者介護や障害者福祉の分野は利用者も事業所も右肩上がりが増えていく。

皆さんはこれらの施設や事業所がどれくらいあるか、ご存じだろうか？ 2025年時点で高齢者介護は約26万7000カ所、障害者福祉は約16万3000カ所だ。これはコン

ビニの数と比べると、それぞれ約4・8倍と約2・9倍に相当する。それに対して、指導や監査を担当する自治体の職員はほとんど増えていない。追いつくわけがないのだ。

でも、民間事業者が増えれば、質を確保するための仕組みやチェック機能が必要になることは分かっていたはずだ。政治も行政も、そして私たちもそこは見えて見ぬふりをしてやり過ぎしてきた。

その結果、何が起こったか。何が起きているか。象徴的な出来事は、2023年に表面化した障害者向けグループホーム大手運営会社「恵」^{めぐみ}の問題だろう。

「ふわふわ」という名前で各地に約100カ所のホームを展開していた恵。入居者から徴収した食費を本社が中抜きし、粗末な食事で入居者がどんどんやせていく。経験のない職員が重度の障害者にどう対応してよいか分からず、虐待する。現場では悲惨な状況になっていたが、会社はその間もホームを次々と作っていき、行政も開設を認めていた。

それまでの常識からいけば、「まさかそんなことはしないだろう」と行政もほかの福祉事業者も思っていたに違いない。対応が難しい重度の障害者を、お金儲けのために安易に受け入れたら、当然、現場は破たんして、とんでもないことになる。普通に考えれば分かることだ。「だから、そんなことをするわけがない」と多くの人が思っていた。

ところが、それをやる人が現れてしまった。そして、そのとき、歯止めをかけられるシステムや運用になっていなかった。その結果、入居者の中には致命的なダメージを受けた人がある。胸を引き裂かれるような思いをした家族もいる。スタッフも人生を狂わされた。「それは極端な例でしょ」と思う人もいるかもしれない。ただ、程度の違いはあれど、根っこは同じという現象が医療や介護、福祉の現場で確実に広がっている。そこでは、いろいろなものが損なわれている。人の生活や人権であったり、従事する専門職のプライドであったり、家族の思いであったり。そして、私たちが払っている税金や保険料もまた損なわれている。

この本でこれから書くことは決して楽しい話ではない。うんざりするかもしれない。「悪い面ばかり強調しているのではないか」と思われるかもしれない。確かに、よい事業者のよい取り組みを集めた本にしたなら、読者に与える印象は全く違うものになるだろう。そこは理解した上で読んでいただきたいが、一方で誇張やウソを書くつもりはない。私が取材で見聞きしたことをそのまま書くだけだ。

「私には関係ないことかな」と思う人も多いだろう。でも、この本に登場する当事者の多くは、若い頃あるいは自分がその立場に置かれるまでは、自分がそんな目に遭うとは想像

していなかったと思う。当事者や従業員になって初めて「え、なんでこんなことになってんの!?」「どうして誰も何にも言わないの?」とがく然とするのだ。

取材を通して現状を知った立場の記者として、そういう人なるべく出たくはないと思うし、書き記す責任があると思うので、書くことにする。声を上げられない障害のある人や、その家族、現場で働いている福祉職の人たちが少しでも心穏やかに生きられるようになってほしい。それは、知的障害の子どもがいる私にとっても他人事^{ひとごと}ではないからだ。